〔書　評〕

国立国語研究所著『大都市の言語生活　分析編』『大都市の言語生活　資料編』

宇野義方

一

国立国語研究所の年報26は、昭和四十九年度における同研究所の研究および事業の経過について述べたものであるが、文部省科学研究費補助金の交付を受けて行った研究の一つとして、次のようなことが記してある。

総合研究（A）大都市における言語生活の実態調査（代表野元菊雄）……大都市住民の言語生活の実態を知るために、今年度は東京および大阪において、一般市民をサンプリングにより、東京で一〇〇〇人、大阪で五〇〇人調査した。調査内容は、社会生活や言語生活についてのアンケート方式による自記式回答と、面接調査による言語のいろいろな面の聞きとりである。結果は今集計中である。（同書五頁、なお、年報も本報告書も原文は横書き）

昭和五十六年三月二十八日に国立国語研究所の研究発表会が開催されたが、その中に、南不二男氏の「大都市の言語生活」が入っている。そこでの発表は、右の総合研究の結果の一部分であった。ここで取り上げる二冊の書物の奥付には、同年の三月二十五日の発行となっているが、研究発表会の席では、まだ現物を見ることはできなかった。したがって、この研究の結果を外部の者が知ったのは、この発表会が最初であった。部分的なものとはいえ、その発表はまことに興味深いものであったが、全体が二冊にまとめられて刊行されたことは大変喜ばしい次第である。なお、同研究所の年報32に、昭和五十五年度刊行物の一つとして、本書が取り上げられ、二頁にわたって、その概要が述べてあることを付け加えておく。

二

ここで、本書の構成を、目次によって見ることとしたい。

第一章　調査の概要

一、一、目的と意義

一、二、調査の方法
一、三、調査実施の分析
一、四、被調査者の属性
第二章　社会構造と言語生活
二、一、大都市の性格
二、二、東京人意識・大阪人意識
第三章　言語使用とその意識
三、一、言語意識
三、二、ことばのイメージ
三、三、一日の言語生活
第四章　アクセントの実態
四、一、東京のアクセント
四、二、大阪のアクセント
四、三、東京・大阪を比較して
第五章　語彙・文法の実態
五、一、「あさっての翌日」と「あさっての翌々日」
五、二、可能表現をめぐって
五、三、副詞、及び方言的な言い方
五、四、サ変動詞をめぐって
第六章　敬語使用の実態
六、一、人称代名詞の使い分け
六、二、敬語の使い方
六、三、あいさつ行動
第七章　相関分析
七、一、ことばのイメージのパターン分類
七、二、言語行動の類型化
七、三、アクセントの型の形成要因
第八章　調査結果のあらまし
英文概要
索　引

右は分析編の分である。資料編の大部分は集計結果表であるが、その「主な内容」は、左のようになっている。

第一部　フェイスシート項目およびこれに準ずる項目
＊性、年齢、学歴などの基本属性
＊両親、配偶者などの出身地
＊住居形態、階層および調査情報
第二部　面接調査項目
＊敬語、人称代名詞
＊サ変動詞、副詞、可能動詞
＊東京方言・大阪方言語彙
＊ことばのイメージ
＊支持政党その他
第三部　言語生活調査項目
＊話す・聞く・読む・書く行動
＊あいさつ行動
＊言語意識、ことばの男女差
＊父母の呼び方
＊大都市の長所・短所その他
第四部　アクセント項目
＊二拍語類別語彙

＊東京・大阪でゆれのあるアクセント
第五部　移住者対象項目
＊東京人意識・大阪人意識
＊移住の理由、ふるさととのつながり

これによっても分かるように、資料編の方は調査項目の性格に即したまとめ方になっているが、分析編の方は一般の調査研究の報告書の構成の型をとりながらも調査者の主たる関心が反映したまとめ方になっている。

それについて、一言触れておくと、資料編の中には留置調査によるものと、面接調査によるものとが区別されている。すなわち、第三部が前者で、その他は後者である。第一部は被調査者の属性に関するもの、第五部は大都市に顕著な移住者に対するものであり、第二部と第四部とが言語の構造面に関するものと言えるであろうが、特にテープに収録したという点で第四部が区別されているようである。

分析編の中には第四章から第六章まで「……の実態」という題の付いているものがある。これは、資料編の第四部と第二部とに、ほぼ対応し、国語学の概論などで扱われる「音韻・語彙・文法・敬語」などの項目に関係する部分である。第三章と第二章とは資料編の第三部にほぼ対応している。第七章は第二章から第六章までの分析をさらに深めるものである。

三

分析編の三六八頁は奥付の裏に当っているが、そこに〈国立国語研究所の「社会言語学研究」報告概要〉として、次の文献が掲げてある。

八丈島の言語調査（報告一、一九五〇年）
言語生活の実態（報告二、一九五一年）
地域社会の言語生活（報告五、一九五三年。報告五二、一九七四年）
共通語化の過程（報告二七、一九六五年）
言語使用の変遷（一）（報告五三、一九七四年）
敬語と敬語意識（報告一一、一九五七年）

本書は、このような調査研究の延長線上に位置を占めるものである。文部省の補助金二百八十万円の交付を受けた（分析編二〇頁）ものであるが、これだけの調査研究ができたことは、すばらしいというべきであろう。調査結果の発表が遅くなったことについては「調査の反省」の項に取り上げられているが、担当者の努力は並大抵ではなかったことと想像する。

大都市の言語生活の実態に関心を抱く者にとって、本書の出現は、大変有難いことである。ここには、数多くの調査結果が述べられており、個人の力では極めて困難なこと、あるいは不可能なことが実現されている。この領域の調査研究に当る場合、本書は重要な文献の一つとして見逃すことのできないものというべきであろう。

本書には、重要な問題や興味のある結果がたくさん含まれているが、限られた紙数ではとても十分には取り上げられない。そこで、その中から、いくつかの問題を選んで扱うことにする。

本書の書名は『大都市の言語生活』であるが、これは言うまでもなく「大都市における言語生活の実態調査」の報告書である。課題

名と書名とは、必ずしも同一でなくてもよいのであるが、「実態」という語が書名に入っていないのは、単に書名が長くなるのを避けるためであったのか、別の意図があったのか知りたいように思う。分析編の四、五、六の三つの章に「実態」という語が用いてあることから察すると、特別の意図はなかったのかもしれないが……。何故、書名にこだわるのかと不審に思われる向きもあろうが、私としては、かなり基本的な問題に関係があると考えるからである。先ず、この調査の目的がどのように述べられているかを見ることにする。

近年、人口移動の活発化により人口の大都市への集中があり、大都市の国民全体に対する重みはますます増している。この大都市で営まれている言語生活の実態を調査し、これからの変動を予測し、これに対処する効果的な言語教育の施策立案の学問的根拠を得ることを目的とする。併せて、東西の中心都市である東京・大阪の住民の言語状況を比較し、その、相異点を明らかにする。（資料編）

この調査は、人口・経済・文化その他の諸側面で全国に対するウェイトの高い大都市住民の言語生活の実態を把握し、これを通じてこれからの日本語の変化の姿を推測することを主目的としている。また、日本の東西の中心都市である東京・大阪での言語状況を比較し、その相違点を明らかにすること、および大都市での言語の実態研究の方法論の確立など種々の目標を合わせもつものである。（年報32）

分析編の表現は、これらとも少し異るが、年報32と資料編とで、若干のずれが見受けられる。私の理解では分析編の表現を要約したものが年報のものに近いように思われるのであるが、「主目的」という表現が分析編には出ていない。

これだけの規模の調査をするのであれば、いろいろな事項を扱いたくなるのは当然のことであるが、「主目的」と「種々の目標」とが、明確に位置づけられている必要があるし、そのことが調査の企画・実施・報告を通じて貫かれるべきであろう。

言語生活の実態の把握と日本語の変化の姿の推測とは、かなり異る作業である。これまで、国立国語研究所で行った調査研究の中には、共通語化の要因や過程・段階などを扱ったものはいくつかあったが、「共通語あるいは標準語はどう変わるかを推測」（分析編、一頁）するようなものは、あまり多くなかった。二つ以上の語形なり言い方なりのある場合、どちらが望ましいかの意見を求めるような調査はあったが、日本語の変化の要因や過程に関する大規模な調査研究は、まだ現れていないと言えるであろう。

ゆれている語形について調査して、例えば高年齢層がAの形、若年齢層がBの形を用いるということが分かったとしても、それだけで変化の姿を推測することは困難である。ここでは、話を単純化するために、年齢層という一項目を挙げたが、共通語の移り変りに影響を与える力がどのようなものであるかは、まだ明らかにはなっていないのである。

それだけに、この調査研究は画期的なものを目指しているとも受け取れるのであるが、それとは異る解釈も可能である。それは「…実態を調査し、…変動を予測し、これに対処する…」の部分の書き方が関係している。もし「…実態を調査する。それによって…予測し、…対処する…」のような意味だとすれば、これは年報とは別の

ものとなる。この二つの解釈の違いは、東京・大阪の二大都市を調査対象とすることや調査の企画・実施にも、大きな影響が及ぶのである。

次にもう一つ、大都市における言語生活の実態の調査研究の問題であるが、国立国語研究所の創設後間もない頃から、それは研究課題として考えられていたはずである。それにもかかわらず実施されずにいたのは、種々の困難が予測されたからであるが、中でも人口が余りに多く、被調査者をサンプリングによって抽出するとしても、精度の高い結果を得るためには、サンプル数が極めて大きくなってしまって、限られた人数と期間と費用では処理できないという点が重要な理由であったと思うのである。もっとも、新聞社などで実施する世論調査では、日本全国から数千人を抽出して結果を出しているのは周知のことである。そのようなことを念頭に置いて、東京千人、大阪五百人というのを見れば、これでもいいのかもしれない。二段階無作為抽出法を採用しているが、言語生活の実態をどの程度まで明らかにできるのか、その精度はどのようにして測定し、満足できるものであったのかなど知りたいことが多いのであるが、残念ながら詳しい説明が見当らない。

大都市における実態調査の困難は、それだけではない。被調査者の捕捉がむずかしいというようなこともあるが、調査達成数が六十数パーセントから七十数パーセントに及んでいる。これは担当者の努力によって、これだけの数になったのであって、理想的とは言えないまでも、大いに評価すべきことであろう。

いずれにしても、これまで行われたことのない、大きな困難の予想される、大都市での実態調査に着手したことは、その方法論の確立に一歩を踏み出したものとして注目すべきである。

ここで本書の書名に立ち返るが、「実態」の語の付かない方が含む範囲が広くなり、また、多くの目標を扱うのに適したものとなるであろう。本書の編集幹事が右のように考えたかどうかは知らないが、私としては、この書名が適切であったと思う。

四

本書には、注目すべきことが少くないが、初めの方に「社会言語学的調査の基礎になる理念」（分析編一八頁）が述べてある。この部分は野元菊雄氏の執筆したものであり、小見出しは「言語の学際的研究と社会言語学」「ことばの個人差」「個人差とラングの問題」「社会言語学について」「調査の結果について」のようになっている。その趣旨は、社会言語学はパロールの言語学であり、ラングの言語学に優るとも劣らない価値がある。その中には今後の研究を要するものもあるが、できる範囲で調査を進めることが必要であるというようなことである。それには私も同感であるが、この叙述の中には論議をひき起こしそうな点が含まれている。たとえば「一体、ことばの個人差といったとき、大体同じくらいの年齢を切り取って考えているわけである」。（分析編七頁）と述べてあるが、必ずしもそうではないと思う。また、ある社会のラングの語彙に関して、「ある個人はそのうちのあるものを知らないこともあり得るとして、理想としてはそれをも習得すべきものと考えるべきである」。（同八頁）とするが、そう考えるべきであると決っているものでもないと思われる。なお、「正確に言えば、女性の平均年齢は、男性より五歳上であるから、…」（同一四頁）というように書いてあるが、こ

れは「平均寿命」のことであろうと思われる。ここで言葉のあらさがしをするつもりはないが、説明不足というか言葉が足りないというか、ともかく問題になりそうな部分が、いろいろあると思う。紙数を十分にとって述べてあれば、そういう類の問題は少くなったであろう。とはいうものの、こういう態度表明を加えたことは、大いに意義のあることである。

分析編の四、五、六の三章には、従来問題とされている「ゆれ」の中から、主要なものを取り上げて調査した結果が多くを占めている。東京と大阪とを、ほぼ同時に調査して、両者が比較できるようになっていることを含めて、こういう問題に新しい情報が加わったことは、有益であった。ただし、例えば「坂」をサカ|(ガ)というかサ|カ(ガ)というかという問題は、東京のアクセントのゆれで重要な項目であるが、今回の分析では特徴が明らかになっていない。東京の中での地域などもあわせて調べればよい結果が出るであろうとしている(分析編一九一頁)が、どうして山の手と下町とに分けて集計をしなかったのか、疑問に思う。それなしでは、限られた調査語の中に「坂」を含めた意味は少くなってしまうのである。

「言語生活調査」(留置調査)の調査票の十六番に「あなたは、小学生のころ、御両親をどう呼んでいましたか。」という項目がある。この問題も興味のあるものであるが、分析編では扱われていない。資料編の一三七、一三八頁に集計表が出ていて、大いに参考になるが、無回答とその他(語形が示されていないもの)との合計は、東京・大阪ともに一〇%を超えている。なぜ分析編で取り上げなかったのかは知らないが、「その他」の内容が知られれば、いっそう有難かった。もっとも、この質問のしかたは、ややあいまいな点がある。直接に呼びかける時と他者に対して父・母のことをいう時、さらに、小学生の低学年と高学年というように、細かく分けられれば、さらに良質の結果が出たかもしれない。こういう調査では、この例だけでなく、質問のしかたが大変難かしい反面、調査項目や紙面の関係で、いろいろな制約があるので、右のようなことは無理な注文であろうか。

一日の言語生活の中で「電話でどのくらい話すか」を調査している。「どういうものか、東京でも大阪でも、申し合わせたように、受けたという人が、かけたという人より一割強多い」。(分析編一五八頁)としているが取り次ぎのようなことはどう見るのであろうか。なお、「かけた」「受けた」だけでなくおおよその回数でも分かると、さらに興味深いと思う。

アクセントの実態について、東京では四十点中三十六点以上を東京型(同一七八頁)とし、大阪では二十八点以上を許容範囲(同二一七頁)としている。なぜそのような数値にしたかは分からないが、東京と大阪とで扱い方に差異があるのは奇妙な感じがする。ついでながら、「無声拍とアクセントの問題」(同二一二頁以下)では、従来の常識を改める必要のあることが明らかにされている。担当の杉藤美代子氏は『言語研究』七十九号にも関連論文を発表している(ただし、本書二二四頁の参考文献とは題名が異っている)。

言語意識に関する部分で、NHKの調査結果を参照し引用しているものに、どうも数字の誤らしいものが二、三ある。明白に誤であることが分かるのは「表3—11」(同一一三頁)の全体の%の部分で、四三・二とあるのは四二・六が正しい。

五

この調査研究は、住民が混質的である大都市での調査であり、いわゆる方言研究とは異質のものである。しかも、言語の構造面（言語要素）だけでなく、どのような条件のもとでどう使われるかを明らかにしようとしている点で、特異なものというべきであろう。本書の終りに「調査の反省」が述べられており、不十分であった点も見られないではない。しかし、それはそれとして、われわれは、この報告書二冊から、多くのものを汲み取ることができる。本書の執筆者はもちろん、調査研究に関係した諸氏の労に敬意を表して筆をおく。

（昭和五十六年三月二十五日発行　三省堂刊　『分析編』はA5判三六八頁　七八〇〇円　『資料編』はA4判横長　二六四頁　一二〇〇〇円）

――立教大学教授――